

北里柴三郎、江口襄と大道醫院



(国立国会図書館所蔵)

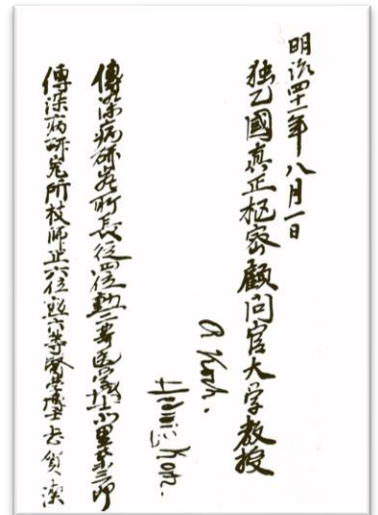
ドイツ医学留学生19名 1888年6月、赤十字国際会議に政府委員として出席 帰国後、ほとんどが後の日本の近代医学の発展に寄与した。江口襄、北里柴三郎は2列目の右から1人目、2人目、森鷗外（林太郎）は同列左端。明治二十一年六月三日（鷗外「ベルリン写真」の謎を解く）に奇跡の1枚の写真として詳しく19名の医学者の日本の近代医学への功績が報告されている。



江口襄



ロベルト・コッホ博士夫妻、北里柴三郎（右）、志賀潔（左2人目）と江口襄（中央）
(1908年 山田赤十字病院)



伊勢神宮参拝の記帳
(1908年8月1日神宮司庁)
ロベルト・コッホ博士
北里柴三郎、志賀潔



大道庄蔵



大道庄蔵 前列右から3人目
(東大三四郎池にて)



旧大道醫院 大道近蔵（左2人目：庄蔵の弟）1922年頃

江口襄と大道庄蔵（大道醫院先代）

- 江口襄(えぐちのぼる)1854年3月8日 - 1924年7月31日 栃木県烏山町出身の医師、陸軍一等軍医正。作家江口渙の父。1881年(明治14年)、東京医学校(現東京大医学部)卒。同期に森鷗外、二級下に北里柴三郎らがいた。1)5)7)11) 鷗外の小説『雁』に出てくる石原は江口襄がモデルと言われている。8)
- 1885年(明治18年)江口は日本人で最初の肺外科手術(肺化膿症、肺壞疽)に成功している。(第5回日本外科学会)5)
- 1888年(明治21年)江口は北里と森と同時期にドイツに留学しており、裁判医学(現在の法医学)を勉強した。ベルリンでの集合写真では北里、江口、森ともに中列で、重鎮のなかで軽い扱いであったが互いに切磋琢磨し3人とも帰国後、日本の近代医学の発展に寄与することとなる。4)5)6)7)11)
- 1892年(明治25年)相馬事件:旧相馬中村藩主、相馬誠胤の相続問題で日本の精神医学における人権保護や裁判医学(法医学)に関して影響を与えた明治の大事件である。藩主の死因をめぐって毒殺か病死かの裁判が行われ、高名な大学教授、医学者が多数関与した。江口襄は司法当局から、解剖主任を依頼された。相馬誠胤の死因解明のため青山墓地の遺骸の発掘解剖、鑑定結果で裁判を結審させた。9)10)11)14)
- 1897年(明治30年)大阪城南病院院長就任
- 1898年(明治31年)熊本第六師団軍医部長 小倉第十二師団に転勤
- 1901年(明治34年)日本赤十字社山田赤十字病院(現伊勢赤十字病院)初代院長となる。欧州に比較し遅れていた日本の近代病院医療の導入構築及び江口の妻、甲子(きね)と看護学校を創設し看護教育指導にも尽力した。2)3)
- 1904年(明治37年)東大医学部の後輩で外科医として師弟関係にあった大道庄蔵を山田赤十字病院副院長として招聘した。2)
- 1905年(明治38年)、大道庄蔵、江口襄の二女、静江と婚姻。1906年(明治39年)、第7回、日本外科学会で、子宮癌など12例の手術摘出病理標本を提示した。2)12)13)
- 1908年(明治41年)江口襄はドイツから結核菌発見者、ノーベル医学生理学賞を受賞したロベルト・コッホ博士を北里柴三郎らを介して山田赤十字病院に招待した(写真)。伊勢二見ヶ浦で歓迎会を挙行。同年、大道庄蔵が大道醫院を開業 2)3)15)
- 1912年(明治45年)江口襄が山田赤十字病院を退職、大学に近い東京本郷弥生町に戻るが、晩年は郷里の栃木に隠退した。

参考文献

- 1)山崎光夫:明治二十一年六月三日 鷗外「ベルリン写真」の謎を解く 講談社 P194-204, 2012年7月9日
- 2)高橋陽一:山田赤十字病院百周年記念誌:百年の歩み 第1編 病院の歴史 歴代院長 江口襄 P73-78, 大道庄蔵 P76, 2004年10月
- 3)加藤 昭:山田赤十字病院の歴史 日本病院会雑誌 P147-151, 1995年3月
- 4)高橋陽一:伊勢の江口襄院長寸描 鷗外 108号 P20-34, 2021年1月
- 5)新実藤昭:江口襄軍医について 日本医事新報 No3182 P59-63, 1985年4月20日
- 6)新実藤昭:江口襄軍医について P169-194, 伊勢におけるコッホ博士 P195-205, Esprit des Details 玄同社 1985年9月23日
- 7)新実藤昭:続・江口襄軍医について 日本医事新報 No3233 P59-63, 1986年4月12日
- 8)森鷗外:雁 新潮文庫 P110-114, 1948年12月5日
- 9)江口襄:故相馬臚胤死體剖検記事 国家醫學會雑誌第八十三號 P16-20, 1894年3月15日
- 10)岡田靖雄:相馬事件 七 墳墓発掘、そして逆転 六花出版 P232-238, 2022年7月7日
- 11)東田浄土:烏山の烏 郁朋社 2017年8月9日
- 12)大道庄蔵:醫海時報 第六百十八號 第七回日本外科学會 P46 1906年4月21日
- 13)大道庄蔵:順天堂醫事研究會雑誌 第三百九十九號 第七回日本外科学會順序 十二ノ標本供覧 P98, 1906年
- 14)大道近也:相馬事件-江口襄の相馬臚胤剖検所見を現代循環器学から考察した死因の探求 日本医史学会雑誌 第70巻3号 P326, 2024年(次頁)
- 15)Ogawa Mariko:Robert Koch's 74 Days in Japan. Mori Ogai Gedenkstatte der Humboldt Universitat zu Berlin 2003

相馬事件——江口襄の相馬誠胤剖検所見を 現代循環器学から考察した死因の探求

大道 近也

高輪台おおみち循環器内科クリニック

相馬事件は明治年間に起こった御家騒動で旧相馬中村藩主、相馬誠胤の精神病をめぐる、精神病患者の人権保護に関して影響を与えた事件である。死因を追求する裁判が行われ、高名な大学教授、医学者が多数関与した。司法当局から死因の判定のため遺骸の剖検を依頼されたのは軍医正の江口襄である。江口は東大医学部では森嶋外と同期で、北里柴三郎ともドイツ留学時代親交があった。また、大道医院先代の大道庄蔵の義父で筆者の遠縁でもある。江口襄と大道庄蔵は東大医学部では師弟関係にあり、初代院長となった山田赤十字病院に大道庄蔵を副院長として招聘している。本研究の目的は、当時の報告書から現代循環器学の観点から病態を解釈し相馬誠胤の死因について考察することである。江口襄と大道庄蔵の近代外科学への功績についても寸評する。

【臨床経過】 死亡診断書は時発性躁狂（統合失調症）、兼尿崩及糖尿病、経過約15年、心臓麻痺に因り明治25年2月22日午前6時死す、享年40歳

「明治25年1月30日、脈拍72/分 体重は21貫680目（81.3kg）ありし、2月20日、四肢冷感、チアノーゼを呈する。体温36.5、脈拍弱108/分あり、尿は透明痰黄色にして、比重1001を有し、蛋白及び糖分は含まず。2月21日、脈拍100/分、心動極めて微弱且つ不正なり、体温36.2 尿量は24時間中に4100mlあり、四肢のチアノーゼは増加し、口内乾燥し、2月22日、尿量150ml 比重1031、白色の沈渣 蛋白尿の痕跡あり、糖分は著明なる反応を呈し、午前6時、心臓麻痺に依り死去せり」（国家医学会雑誌第83号、明治27（1894）年3月15日）

【臨床経過の考察】 死亡2日前より脈拍108/分で頻脈傾向となっている。脈拍微弱で血圧低下傾向にあるが、尿量は前日でも4100mlと多量で尿崩症の影響は続いていた。この時点で心不全はあったとしても尿崩症が鬱血傾向を相殺している可能性があった。死亡前日によく夜間尿量150mlと低下、チアノーゼが悪化してきており、不整脈も認めている。

【剖検所見と考察】 「心囊の内面は汚穢灰白色にして滑澤なり、囊内には液汁を存せず心臓外面は帯黄白色にして頗る脂肪に富み滑澤なり、冠静脈は青色にして脂肪層下に透映し、心臓は著しく膨大し、左右室房を切開するに其切断面は帯黄褐色にして其質脆弱なり」心外膜側の脂肪が豊富に観察されている。肥満症で冠動脈に動脈硬化、動脈狭窄が存在した可能性があるが、冠静脈の観察所見のみの報告で冠動脈の観察所見ではない。心拡大が認められ、壁断面は質脆弱で拡張型心筋症に矛盾しない所見である。「心室は拡張し三尖弁孔へは三指を挿入すること得 心室内には血液及び凝血を存せず」三尖弁孔は三横指までの広がり少なくとも三尖弁閉鎖不全及び心不全が中等度はあったと考えられる。心室内血栓は認められない。「房の内面は汚穢暗灰白色、室の内面は汚穢暗褐色にして滑澤なり、筋肉層は非薄にして三尖弁僧帽瓣半月様縁及び大動脈肺動脈の内面は汚穢白色なり」僧帽弁閉鎖不全症も合併し両心房筋は拡張していた可能性がある。「心臓乳頭筋及室壁筋層の細片を取り微細に分割し鏡検するに筋繊維の境界明瞭ならず且横紋は消失し」心室筋の線維化が顕著であることより、診断として拡張型心筋症が最も考えられる。

【結語】 以上より死因を推察すると、拡張型心筋症による心不全、弁膜症の合併、糖尿病は軽症で冠動脈狭窄による虚血性心筋症の可能性は少なく、尿崩症からの電解質異常、低カリウム血症、心室細動による心臓振盪が直接的な死因と考えられた。